

飼育下エランドのオス群れにおける闘争と親和的な行動の分析

荻ノ沢 修平

はじめに

エランドはアフリカ大陸に生息する大型の牛である。IUCN レッドリストによると LC に分類されているものの、実際には個体数が減っており保護区内と飼育下で見られる程度との報告もある。ズーラシアでは5頭（オス3頭・メス2頭）のエランドを飼育しており、雌雄を分離した群れを形成している。成獣1頭と亜成獣2頭で形成されるオス群れにおいて、不定期に身体接触を伴う闘争や親和的接触が観察できるものの、個体間の関係性や闘争が起こる場所など不明な点が多い。そこで本研究では、エランドのオス群れを対象に行動観察を行い、飼育下で起こる身体接触を伴う行動に、特定の個体の組み合わせや起こる場所など、ある一定の傾向が表れるかどうか明らかにし、その行動の要因について考察する。なお、本研究で扱う闘争は儀式的闘争である。

方法と結果

供与個体は①No. 5（オス）、②No. 11（オス）、③No. 12（オス）の3頭である。No. 11とNo. 12は亜成獣であり、どちらも父はNo. 5である。行動観察は、サンプリングA（瞬間サンプリング/9月～11月）とサンプリングB（ランダムサンプリング/12月）の2種類の方法で記録した。観察結果は、①と③間では闘争よりも親和的接触が多く、②は①及び③と闘争が多く親和的接触はほとんど見られなかった。また、身体接触を伴う行動の発現場所はサンプリングAとBで異なっていた。